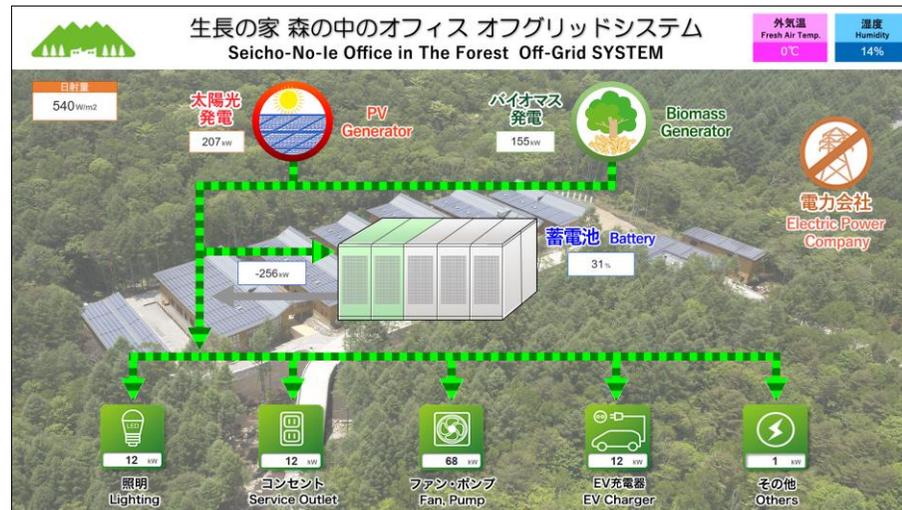


生長の家環境マネジメントシステム 2022年度 環境パフォーマンス報告書



※オフグリッドシステムの説明パネル

ISO14001国際規格に基づき、2022年度（1月～12月）の生長の家における環境パフォーマンスを報告します。

発行：2024年3月1日

作成：宗教学法人「生長の家」国際本部環境共生部

担当：環境共生部（田中、河野）

問い合わせ先：山梨県北杜市大泉町西井出8240番地2103

TEL：0551-45-7747（直通）

目次

1. 教団としての啓発活動	
新年のビデオメッセージ、動画リンク集、書籍・月刊誌.....	3頁
P B S（プロジェクト型方式）の活動.....	4頁
インターネットでの啓発、家庭での取り組み.....	5頁
2. 教団外への啓発活動	
森林保全活動への寄付と飢餓救済募金.....	6頁
ウクライナ支援イベント	7頁
ウクライナ救援募金、フードバンク、営農型太陽光、風力.....	8頁
3. 炭素ゼロ運動の成果	
全国66事業所における炭素ゼロ運動の成果.....	9頁
自然エネルギー拡大運動.....	10頁
メガソーラー、会員努力のCO ₂ 削減、電気自動車.....	11頁
大分県教化部新会館の落慶.....	12頁
オフグリッド、ZEB（ゼロ・エネルギー・ビル）	13～14頁

新年のビデオメッセージ、動画リンク集、書籍・月刊誌

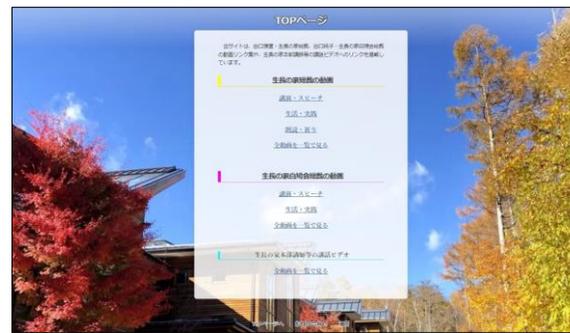
生長の家では、「神・自然・人間は本来一体である」という宗教的真理に基づいて、人々のライフスタイルを自然と調和した持続可能なあり方に転換して行くことを目指し、地球環境問題の解決に貢献する生き方を推奨しました。

新年のビデオメッセージ



2022年1月1日、谷口雅宣・生長の家総裁の新年のビデオメッセージを、生長の家公式サイトで一般に公開。メッセージの中で、新型コロナウイルスのパンデミックも3年目を迎え、先の見通せない不安定な状態が続く中、日時計主義で生きる大切さをご教示。さらに、生長の家の役割は、このような災害や失敗から正しく学び、私たちの内部にある神の心、仏の心と呼び覚まし、「神・自然・人間の大調和」を目指す“新しい文明”に向かって、明るく、行動していくことであると説かれました。同ビデオは、英語、ポルトガル語、中国語、韓国語、スペイン語、ドイツ語の6言語の字幕入り動画も同時に公開されました。

SNI-動画リンク集



谷口雅宣・生長の家総裁、谷口純子・生長の家白鳩会総裁の動画リンク集や、生長の家本部講師等の講話ビデオへのリンクをまとめたウェブページです。

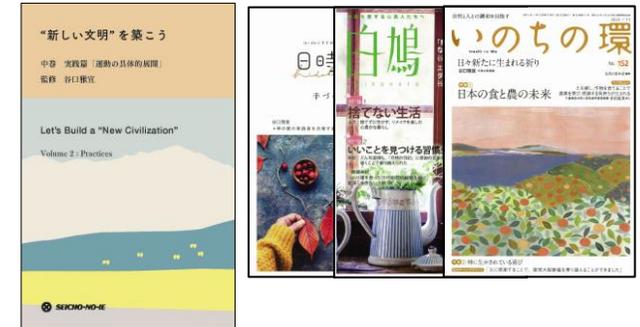
新型コロナウイルス感染拡大防止のために、生長の家講習会をはじめ、講演会、練成会、誌友会等の対面の行事を開催することが難しい状況の中、この取り組みは生まれました。

掲載の動画は、環境保全の啓発、また明るい人生を築くための指針や活力として、自己研鑽やネットフォーム等において積極的にご利用いただきました。

生長の家の動画リンク：

<https://snivideolinks.ubemstudygroup.com/>

書籍・月刊誌



谷口雅宣・生長の家総裁監修の『“新しい文明”を築こう（上巻）基礎篇「運動の基礎」』『“新しい文明”を築こう（中巻）実践篇「運動の具体的展開」』（写真左）、谷口純子・生長の家白鳩会総裁著の『森の日ぐらし』等の書籍の頒布を通じて、自然と人がともに繁栄する“新しい文明”のライフスタイルへの転換を促しました。

また、生長の家の組織会員向けの月刊誌（機関誌『生長の家』）、一般向けの月刊誌『いのちの環』（総合誌）『白鳩』（女性誌）『日時計24』（青年誌）（写真右）に、毎号、環境保全に関する記事を掲載しました。

PBS（プロジェクト型方式）の活動

生長の家では、人間の欲望追求のために自然を破壊し、地球温暖化による気候変動を引き起こしている“古い文明”から、自然の繁栄が人間の繁栄となる“新しい文明”への転換を促すために、PBS（プロジェクト型方式、以下の3つの部）によってその価値観と低炭素のライフスタイルを生活の中で実践しています。ミニイベントの開催やインターネット上のFacebookなどのSNSを使って広める活動に取り組んでいます。

SNIオーガニック菜園部



「食卓から未来を変える」日本教文社刊
「SNIオーガニック菜園部」の活動紹介の本

SNIオーガニック菜園部は、「ノーミート、低炭素の食生活」を実践し、普及するPBSです。メンバーがノーミートの食生活を心がけることはもちろん、野菜や穀物については、有機農法によってベランダや家庭菜園で自ら栽培することに挑戦し（写真参照）、それらを収穫し食すことで、地域と季節に即した自然の恵みの有難さを味わい、地域の人々とも共有しています。

また、購入する食材は、有機無農薬で、地産地消・旬産旬消のものを選ぶことを勧めています。

SNI自転車部



「自転車から平和を」日本教文社刊
「SNI自転車部」の活動紹介の本

SNI自転車部は、「省資源、低炭素の生活法」を実践し、普及するPBSです。自転車はガソリン車の燃料となる化石燃料を使わず、CO₂を排出せずに移動できる大きなメリットがあります。この自転車を生活の中で活用することで、二酸化炭素の排出を抑制し、地球環境保全に大きく貢献することができます。

また、上達する喜び、風を切って走る爽快感は子供も大人も、国も超えて世界共通です。自転車の利用（写真参照）で心豊かで健康的な毎日を送ることができ、その意義と楽しさを世界に伝えることによって世界平和を目指しています。

SNIクラフト倶楽部



「手づくりが世界を救う」日本教文社刊
「SNIクラフト倶楽部」の活動紹介の本

SNIクラフト倶楽部は、「自然重視、低炭素の表現活動」を実践し、普及するPBSです。メンバーは、箸や写真立て、本箱、小物入れ用のポーチなど、生活の中で手にする身近なモノを、自分の手でつくっています。（写真参照）モノづくりに欠かせない“素材選び”は、木材なら国産材、植物や動物から分けてもらえる天然繊維の糸や布など、自然重視の選択をします。安く・早く・楽に手に入る大量生産、大量消費の消費生活から、身の回りのモノを大切に生かす、丁寧なライフスタイルを広めています。

インターネットでの啓発、家庭での取り組み

生長の家では、インターネットを活用した啓発活動に取り組みました。また、生長の家の会員、信徒には、信仰に基づく倫理的な生活者として、『日時計日記』と「生活の記録表」の活用等を通して、低炭素なライフスタイルへの転換を奨め、地球環境問題の解決に貢献する生活実践に取り組みました。

インターネットを活用した啓発

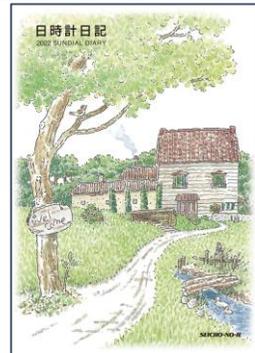


生長の家公式サイトを活用し、低炭素のライフスタイルの普及とそれを実践するPBSの活動を前面に打ち出しています。

また、SNI-動画リンク集の谷口雅宣・生長の家総裁、谷口純子・生長の家白鳩会総裁の動画や、生長の家本部講師等の講話ビデオをインターネット上（FacebookやZoom等）で視聴して、参加者同士が感想や意見を交換する生長の家遠隔情報交流会（生長の家ネットフォーラム）を開催し、積極的に啓発活動に取り組みました。

写真：生長の家公式サイト のトップページ

『日時計日記』と「生活の記録表」の活用



『日時計日記』（2022年版）



「生活の記録表」（2022年版）

谷口純子・生長の家白鳩会総裁監修の『日時計日記 2022年版』（生長の家刊）を活用して、その日の「環境に配慮したこと」の記載や「生活の記録表」を用いて記載することを推奨しました。会員、信徒などを対象に「生活の記録表」（生長の家国際本部発行、36,000部）を活用し、電気、ガス、水道、灯油、ガソリンの消費量とCO₂排出量を記録し、自宅に太陽光発電装置を設置している場合には、その売電量に見合うCO₂削減量も加算することにして、前年と比較してCO₂排出量の削減に取り組みました。

また、2016年4月からの電力の自由化に伴い、原発や火力発電所由来ではなく、環境負荷の少ない再生可能な自然エネルギーからの電力の調達比率が高い新電力を選択することを推奨しました。「生活の記録表」の配布による家庭でのCO₂排出削減の取り組みは2001年度から継続しています。

森林保全活動への寄付と飢餓救済のための募金活動

生長の家では、生長の家“森の中のオフィス”では、飢餓救済を目的とし、毎月1回、食堂利用者に提供される昼食を、一杯のご飯と味噌汁だけにする「一汁一飯」に取り組み、WFPへの寄付を実施しています。また、森林の減少を少しでも食い止めるため、WWFジャパンによる森林保全活動に寄付を行って支援をしています。

WWFの森林保全活動に寄付



生長の家では、WWFジャパンによる「インドネシア森林保全プロジェクト」に寄付しました。日本国内で継続している「生物多様性保全募金」の全額、及び①谷口雅宣・生長の家の総裁の著書（谷口純子・生長の家白鳩会総裁との共著を含む）の益金の一部と、②生長の家の月刊誌3誌の森林寄付金（1誌に付1円）分からの200万円を含め、2022年度は、総額 1,291,851円でした。この寄付金は、インドネシアのスマトラ島の2つの国立公園周辺及び、ボルネオ島の3つの州において、熱帯林を保護するためのパトロール、植林、調査活動、地域住民への環境教育の実施などに役立てられています。

写真：森を守る次世代を育てる環境教育の実施

「一汁一飯」で飢餓救済に寄付



生長の家“森の中のオフィス”の職員食堂では、2014年4月から、環境問題は資源や飢餓の問題と密接に関係しているとの観点から、世界の飢餓に苦しむ人々に心を寄せ、毎月1回「一汁一飯」の日を設け、減らした食材費で1食300円を寄付する活動を始め、取り組みは生長の家の世界の各拠点に広がっています。2022年度の寄付金額は177,000円（590食分）になり、民間協力の窓口である認定NPO法人国連WFP協会を通じて国連WFP本部（ローマ）に寄付をしています。

写真：一杯のご飯と味噌汁だけの「一汁一飯」

クリック募金で飢餓救済に寄付



生長の家の産業人の組織である生長の家栄える会では、同会公式サイトで「飢餓救済クリック募金」を運営し、ユーザーがクリックをすると、協賛している企業等より、毎月そのアクセス数に応じた金額がNPO法人国連WFP協会を通じて国連WFP本部（ローマ）に寄付され、飢餓に苦しむ人々に食糧が届けられる仕組みを作り、活用しています。2022年度の寄付金額は、948,708円（協賛企業14社）となりました。

飢餓救済クリック募金

<http://www.jp.seicho-no-ie.org/kiga/index.html>

ウクライナ支援イベント（P4U）で平和のための行動をアピール

「環境」と「資源」と「平和」は、互いに密接につながり、一体であるとの認識に立つ生長の家として、これまでISO14001を取得して取り組んできた「環境」「資源」の問題に加え、「平和」の問題に積極的に関わる必要性を感じ、「Peace for Ukraine（ウクライナに平和を）」（略称：P4U）」の言葉を掲げ、ウクライナの人々を支援する活動を行いました。



ウクライナの平和実現のための行動を呼びかけるFacebook公開グループを立ち上げました。



P4Uのロゴマークを決定し、P4Uに関連することに使用できるようにしました。



全国的に、ウクライナ緊急支援募金を行いました。



「ウクライナの平和」への想いを込めて、ウクライナの国旗色のクラフトを作成しました。



ウクライナ国旗を掲げ、ウクライナの方々へ、友愛の情を表現しました。



ウクライナ料理を作ることを通して、ウクライナを身近に感じられるようになりました。

ウクライナ緊急支援募金、フードバンク、営農型太陽光、風力

外部への啓発活動として、生長の家では、ウクライナ救援募金、ウクライナ支援呼びかけのためのミニ図書館・絵馬、フードバンクの活動、営農型太陽光発電、風力発電の設置などを通して、その背景にある教えを紹介し、環境・資源・平和が密接に繋がっていることをお伝えしています。

ウクライナ緊急支援募金

生長の家では、「ウクライナ緊急支援募金」として、2022年9月27日現在で1億707万9,999円を送金いたしました



フードバンクの活動

国際本部では、認定NPO法人「フードバンク山梨」（山梨県南アルプス市）での、ボランティア活動に取り組みました。食品の箱詰めなどを手伝っています。



ウクライナ関連のミニ図書館

外部に向けて、ウクライナ関連の書籍や生長の家の書籍を読むことのできるミニ図書館を設置しました。



営農型太陽光で荒廃農地を活用

世界聖典普及協会（東京・赤坂）が、営農型太陽光発電（815.36kWh）を建設し、自然エネルギーの活用に加え、荒廃農地の再生にも貢献できることをアピールしました。



平和を祈る絵馬

ウクライナの平和を祈る絵馬を企画しました。頒布金は、ウクライナ緊急支援募金に寄付いたしました。



風力発電で脱原発をアピール

世界聖典普及協会（東京・赤坂）が、青森県下北郡大間町に、小型風力発電所（19.8kW）を建設し、脱原発をアピールしました。



6 6 事業所における“炭素ゼロ”運動の成果

生長の家では、2007年度から教団の活動に伴うCO2排出量を実質的にゼロにする“炭素ゼロ”の運動を展開してきました。過去15年間で進めてきた“炭素ゼロ”の運動は、ISO14001の取り組みによる継続的改善などによって2022年度も成果を上げることができました。

主要3事業所が15年連続で達成



2022年度の主要3事業所（国際本部、総本山、宇治別格本山）におけるエネルギー起源8項目（電気、都市ガス、LPガス、灯油、A重油、ガソリン、軽油、上下水道）のCO₂排出量、並びに職員の出張・外勤の移動や本部主催の行事参加者の移動に伴うCO₂排出量は、2007年度から15年連続で“炭素ゼロ”を達成しました。

炭素排出量	146,576.0	kg-CO2
炭素相殺量	-1,944,445.5	kg-CO2
総合計	-1,797,862.4	kg-CO2

写真：宇治別格本山（京都府宇治市）が京都府綾部市に建設したメガソーラー発電所（1,255kW）

他61事業所も合算でも“炭素ゼロ”



2022年度の国内の事業所（教化部・練成道場）計61カ所におけるエネルギー起源8項目等のCO₂排出量の総合計は、昨年に続き、排出権を購入することなく相殺することができ、“炭素ゼロ”を達成しました。

炭素排出量	566,629.9	kg-CO2
炭素相殺量	-2,681,672.9	kg-CO2
総合計	-2,115,043.0	kg-CO2

※炭素相殺量とは太陽光発電の売電分、森林吸収分、自然エネルギー拡大募金による削減分などによって見込まれる炭素削減量のこと。

写真：岡山県教化部会館（岡山市）の太陽光発電装置（30kW）

省エネ、再エネ利用による削減



左記の“炭素ゼロ”の達成の要因としては、各事業所の省エネの取り組みが着実に進んでいること、電力購入先をCO₂の排出係数の低い新電力へ切り替えていること、事業所の太陽光発電の発電による炭素削減効果、事業所が所有する森林のCO₂吸収量による炭素削減、植樹植林等の会員努力（次頁参照）、メガソーラー・大規模ソーラーの発電による炭素削減量（次頁参照）を、各教区からの自然エネルギー拡大募金の口数に応じて配分したことなどが奏功しています。

写真：福島・西郷ソーラー発電所（福島県）

自然エネルギー拡大運動を推進

生長の家では、人類社会が自然エネルギーを全面的に利用することによって「脱原発」と「地球温暖化の抑制」を実現し、自然と人間がより調和した生き方を実現することを目的として、自然エネルギー拡大運動を展開しています。

自然エネルギー拡大募金を継続



2014年7月1日から開始した「生長の家自然エネルギー拡大募金」では、2022年度は、1,208口、12,080,000（2022年1月1日～12月31日）の募金が集まり、累計金額では585,210,000円となりました。

2017年からは、現地の太陽光パネルには寄付者名（希望者）を銘板に掲示することに加えて、日本語版ウェブサイトでも寄付者名を閲覧できるようにしました。

写真：自然エネルギー拡大募金のウェブサイト
<https://www.jp.seicho-no-ie.org/naturalpower/>

大分・別府地熱発電所が稼働



大分県別府市に教団初の地熱発電所を2020年10月から稼働し、2022年も稼働を継続しました。

発電出力は50kW、2022年度の年間実発電量は、114,829kWhでした。地熱発電は、24時間発電できるため、設備利用率は80%以上で、太陽光発電(12%)より効率のよい発電ができています。隣接する大分県教化部会館にも、電力と地熱発電利用後の余剰エネルギーである温泉水の熱を提供しています。

地熱発電は1年を通じて一定量を発電できるという安定性があり、ベースロード電源に位置づけられます。

写真：生長の家大分・別府地熱発電所（別府市）

自然エネルギー利用への助成



自然エネルギーの利用を促進するために、組織会員を対象に、太陽光発電・小型風力発電装置、リチウムイオン蓄電池、電気自動車の導入に際して、助成金を支給しています。

【2022年度の助成の実績】

◆太陽光発電装置の導入件数

8件：助成金額 951,000円
※発電出力1kWあたり2万円

◆電気自動車の導入件数

17件：助成金額 4,937,000円
※1台上限30万円、本体価格の10%まで

◆リチウムイオン蓄電池の導入件数

18件：助成金額 1,575,000円
※1kWhあたり1万円

生長の家のCO₂削減の活動

生長の家の京都・城陽メガソーラー発電所、福島・西郷ソーラー発電所、大分・別府地熱発電所及び国内の事業所の太陽光発電装置によって、二酸化炭素排出削減が進み、教団全体のカーボン・オフセットに大きく貢献しています。

大規模ソーラーの炭素削減量



生長の家が建設した京都・城陽メガソーラー発電所（2015年3月稼働）、福島・西郷ソーラー発電所（2015年12月稼働）、大分・別府地熱発電所（2020年10月稼働）の3カ所の2020年度の発電量は以下の通りとなりました。

【2022年度の発電量】

京都・城陽メガソーラー発電所：1,953,701 kWh

（一般家庭の約678世帯分に相当）

福島・西郷ソーラー発電所：785,062 kWh

（一般家庭の約273世帯分に相当）

大分・別府地熱発電所：114,829 kWh

（一般家庭の約40世帯分に相当）

3発電所の発電量の合計：2,853,592 kWh

（一般家庭の約991世帯分に相当）

3発電所によるCO₂削減量の合計：1,071,753 kg-CO₂（杉の木の年間CO₂吸収量に換算すると76,553本分に相当）

生活の記録表の活用等の 会員努力によるCO₂削減



2020年度より、生長の家として「教化部敷地その他、会員の努力による二酸化炭素削減」を評価することが決定され、教化部等の敷地内の森林、会員の森林の所有、植樹・植林、生活の記録表提出による炭素削減量が炭素相殺に用いられるようになりました。

2022年度は、1,291,486kg-CO₂（杉の木の年間CO₂吸収量に換算すると、92,249本分に相当）の炭素削減が評価されました。

なお、生活の記録表の教区の提出状況については、2021年度の36教区に対して、2022年度は42教区であり、6教区増加しました。また、生活の記録表の会員の提出状況は、2021年度の676名に対して、2022年度は1,200名であり、524名（77.5%）増加しました。

1世帯：2,720kg-CO₂ 杉1本：14kgCO₂で計算

電気自動車の導入の促進 急速充電器を無料で開放



生長の家では、電気自動車（EV、電気マイクロバス）、急速充電器、V2H等を導入し、車両の移動に伴うCO₂の排出量抑制に努めています。全国各地の事業所では、急速充電器の設置と無料開放を進めています。

生長の家の組織会員に対して以下の助成を行っています。

- ・電気自動車の導入時に1台30万円を助成しています。
- ・定置用リチウムイオン蓄電池1kWhあたり1万円を助成しています。
- ・太陽光・小型風力発電に1kWあたり2万円を助成しています。

※助成には、所定の条件があります。

地熱と太陽光を最大限に活用（大分県教化部）

大分教区に新教化部会館（別府）が落慶しました。太陽光と地熱という天と地の自然エネルギーを最大限に生かし、ゼロエネルギービル（ZEB）を実現しました。新会館は、国際本部が運営する「生長の家大分・別府地熱発電所」に隣接し、同発電所から供給される電力（発電能力：49kW）、地熱発電利用後の余剰エネルギーである温泉水の熱、新会館の屋根に設置された太陽光発電（29.82kW）の3つの自然エネルギーを活用します。

新しく落慶した大分県教化部



新しい会館から、地球環境保全のメッセージを発信

屋外の花壇や生け垣などには地元の特産品を活用。大分県花の豊後梅をシンボルツリーとして、別府市花のキンモクセイや別府特産のカボスも植樹しました。こうした地産地消と地球環境に配慮した会館から、自然と人間が共生する“新しい文明”創造のメッセージを広く発信していくことが期待されます。

隣接する地熱発電所



3つの自然エネルギーを活用

新会館は、国際本部が運営する「生長の家大分・別府地熱発電所」に隣接し、同発電所から供給される電力（発電能力：49kW）、地熱発電利用後の余剰エネルギーである温泉水の熱、新会館の屋根に設置した太陽光発電（29.82kW）の3つの自然エネルギーを活用します。

自然のぬくもりを感じる空間



木の温かみを感じる大道場

建材のほとんどは大分県産や熊本県産を中心に国産のスギやヒノキを使用し、来訪者の心を明るくする工夫がされています。また、震度7以上の耐震設計となっています。大道場では、地窓、腰窓、排煙窓を多く設け、自然風による通気や換気ができるほか、天井面にはシーリングファンも補助として設置し感染症対策を施しています。

最新の蓄電池システム



リチウムイオン蓄電池（135kWh）を設置

電気は敷地内に設置されたリチウムイオン蓄電池（135kWh）に蓄えられるほか、電気自動車に供給できるシステム「V2H」も導入され、非常時などには、電気自動車から会館への供給が可能です。

さらに、地熱発電所から供給される温泉水（75度）は、浴槽や足湯、シャワー、手洗いで使用します。

オフグリッド、ZEB（ゼロ・エネルギー・ビル）の成果

生長の家“森の中のオフィス”は、当初からゼロ・エネルギービル（ZEB）として建設され、2020年には、大容量の蓄電池を“森の中のオフィス”に増設して、電力会社の配電網と連携せず、自然エネルギー100%で運用する「オフグリッド」のシステムを構築しました。このコンセプトを国内の教化部会館などの建て替えに順次適用させています。

“森の中のオフィス”（山梨県北杜市）



生長の家“森の中のオフィス”

2020年から、大容量の蓄電池（3,648kWh）を“森の中のオフィス”に増設して、電力会社の配電網と連携せず、自然エネルギー100%で運用する「オフグリッド」のシステムを構築しています。2022年の年間の発電量は、510,087kWhでした。

メディアセンター（山梨県北杜市）



生長の家メディアセンター

2022年度のメディアセンター（出版・広報部門のオフィス、スタジオ兼ギャラリー）の電力量年間集計では、“森の中のオフィス”同様、発電量が使用量を上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量54,000kWh、使用量11,970kWh、買電量15,191kWh、売電量は42,030kWhでした。

原宿光明の塔（東京都渋谷区）



生長の家原宿光明の塔

2022年度の原宿光明の塔（旧国際本部会館の一部を教団の歴史的建造物として残した建物）の電力量年間集計では、発電量36,108kWh、使用量12,615kWh、買電量13,244kWh、売電量23,493kWhとなり、PEB（ポジティブ・エネルギー・ビル）となりました。

※PEB（ポジティブ・エネルギー・ビル）

年間のエネルギー消費量を上回る発電を行う建築物

福島県教化部（福島県郡山市）



生長の家福島県教化部会館

2020年1月、教団初となるオフグリッドシステム（電力会社とつながずに電力を自給するシステム）を導入した建物を建設しました。

年間の発電量90,092kWh、使用量21,891kWhでした。

茨城県教化部（茨城県笠間市）



生長の家茨城県教化部

2022年度の生長の家茨城県教化部会館は、発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量68,380kWh、使用量、12,865kWh、買電量12,703kWh、売電量は55,515kWhでした。